

「男、突っ走る！」

第38回

第一稿

作・壽倉 雅

1 アメリカ・ホテル・成美たちの部屋

唾然としている雅也——うつむいたまま立ち尽くしている美南。

雅也「本当に、俺なんかで良いの？」

美南「（頷いて）……」

雅也「こういう時、どういう答え出して良いのか、全然分かんないし、セリフが出てこないんだけどさ……え……えっと、どう言おう……。俺なんかで良ければ、ぜひ……」

美南「……」

雅也「待って。やっぱり答え方、変だよな。」

ああ……恋愛シナリオなんて、高校の時以来書いてないから全然ダメだ……喜んでつて言うのもおかしいし、よろしくお願いしますって言うのも変だよな」

美南「YESかNOで答えて」

雅也「そっか、ここアメリカだもんね……もちろん、答えはYESだよ」

美南「その答えが聞けたら、私は十分満足だよ」

雅也「ナミ……」

微笑んで雅也を見つめる美南。

N「思いがけないナミの告白に、僕は思わず動揺してしまっていました。こんなエピソードがあつたアメリカ研修もあつという間に終わり、日本に帰国すると、僕らにはまた元の学校生活に戻りました」

2 名古屋芸術専門学校・5階・502教室

雅也、美南、その他生徒たちが藤堂の授業を受けている。

N「日本に戻ってからも、ナミとはアメリカに行く前と同じように授業を受け、課題を作るという、告白される前と大して変わらない生活を続けていました。お互い、授業課題や執筆活動におかける時間も前とは変わらないことだったため、プライベートで会うこともなく、正直なところ何の変化もない生活で、周囲の同級生たちも僕が告白

されたことで、形式上はナミと付き合い合っているということに、誰も気づいてはいませんでした」

3 同・屋上

自販機でジュースを買っている浩平――

――傍らに夏美と瑞枝。

瑞枝「それで、決まったの？ ゆきちゃんと
のこと」

浩平「まだ」

夏美「アメリカで、散々話し合っただでしょ」

浩平「……」

4 アメリカ・ホテル・浩平たちの部屋

（回想）

ベッドの上で、浩平を囲んで話している雅也、夏美、瑞枝、裕司。

瑞枝「ねえ、これからどうするの？」

浩平「うん……」

夏美「このままだと、私たちの関係性にも影

響するんだよ」

雅也「眞榮田は、これからどうしたいの？

まずはその今の気持ちを、知りたい」

浩平「そりゃ、やり直せるのなら、やり直したいさ。けど、向こうがどう思ってるか：

…」

裕司「まあ、それはゆきちゃんの気持ちもあるわな」

瑞枝「向こうの気持ちを尊重することも大事かもしれないけど、ちゃんと腹決めて、結論出さなきゃダメだよ」

浩平「分かってる…：…」

5 名古屋芸術専門学校・屋上（回想戻り）

浩平「…：…」

瑞枝「時間が解決できることと、できないことがあるんだからね。年末までには、ちゃんと話つけなよ」

夏美「忙しいのはお互い様かもしれないけど、一応二人はまだ付き合ってる状態なんだか

ら、結論はちゃんとつけなきゃダメだから
ね」

浩平「ああ……」

6 同・4階・403教室

雅也がパソコンで写真の編集をしてい
る——雪奈が入ってくる。

雪奈「うちー」

雅也「ゆきちゃん」

雪奈「（袋を渡して）はい、海外研修のお土
産。イタリアのお菓子」

雅也「ありがとう。（と鞆から袋を取り出し）

俺も、アメリカのお土産。はい、これ」

雪奈「ありがとう」

雅也「どうだった？ イタリアは」

雪奈「ザ・アートって感じだった。でもね、
料理はあんまり美味しくなかったかな」

雅也「そうなんだ。アメリカもね、店によつ
て当たりはずれがあったの。行きにね、韓
国のソウル空港を経由して行ったんだけど、

そのこのファーストフード店で、緑茶注文したんだよ。そしたら、ペットボトルに『十七茶』って書いてあって、明らかにブレンド茶じゃんと思ってさ」

雪奈「そんなことあったの？ てか、それはアメリカじゃなくて韓国じゃん」

雅也「それもそうか。けど、本当に食事に関してはいろいろあった。それにね、あれは五日目だったかな。眞榮田とみずちゃんと、なっちゃんと、おつくーの五人でダブルベッドで寝ることになっっちゃってさ」

雪奈「どういう状況よ」

7 アメリカ・ホテル・浩平たちの部屋

(回想)

ダブルベッドで横並びに眠っている浩平、裕司、夏美——夏美の足元で縦並びに眠っている雅也と瑞枝。

雅也の声「まあ、いろいろあってね、眞榮田とおつくーとなっちゃんが三人並んで寝て

るでしょ。で、縦向きに俺とみずちゃんが寝てるわけよ」

雅也、目を開けると、夏美の足裏が見える——寝返りを打つと、瑞枝の寝顔が見える。困惑したように、ゴロゴロと寝返りを打ち続けている雅也。

雅也の声「左向いたら、なっちゃんの足裏があつて、右向いたらみずちゃんの顔があるでしょ。俺、どういう態勢で眠って良いかわかんなくて、ずっとゴロゴロ寝返り打ってた」

8 名古屋芸術専門学校・4階・403教室（回想戻り）

雪奈「すごい状態だね」

雅也「全然寝れなかった」

雪奈「でも、楽しかったんじゃないの？」

雅也「まあね。だから、みんなで共有した写真を編集して、アルバム作ろうと思ってた

の」

雪奈「（パソコンの画面を見て）へえ、これなら喜ぶよ、みんな」

雅也「クリスマススのプレゼントにしようかと思っ
てね、それまでに完成を目指してる」

雪奈「無理しないようにね」

雅也「はいはい」

9 同・5階・502教室

美南がパソコンで作業をしている――

藤堂が入ってくる。

藤堂「ナミ、状況はどう？」

美南「年末には、編集作業が一通り終わる予定です。あとは、みんなのやる気次第だからね」

藤堂「一年生の合同文芸誌は、毎年恒例のものだからね。ここで、本を作る知識を学んで、来年以降は自分の個人文芸誌を作る人もいるからね」

美南「私も、できるようになりますかね」

藤堂「そりゃ、できるよゆになるわよ。一つ

一つの作品を作って、ポートフォリオにしていくの。先輩たちだって、そうやってきたんだから」

美南「デビュー決まった先輩とか、いましたか？」

藤堂「まあ、狭き門だからね。作品作っても、なかなかデビューにまで行くのが難しくくて。漫画は編集部との合同プロジェクトがあるけど、小説はそういうのがないからね」

美南「何とかならないものなんですか？」

藤堂「教務にはずっと相談してるんだけどね、同じデビュー系クラスなのに、小説専攻だけ編集部とのプロジェクトがないのはおかしいって。デビュー系クラスって謳ってる以上は、それなりの機会を作ってもらわないと」

美南「ありがとうございます」

藤堂「一年文芸誌の編集長は初めてのことで、かなり大変かもしれないけど、無理しないようにね」

美南「はい」

10 同・4階・401教室く廊下

浩平がパソコンで作業をしている――
雪奈が通りかかり入ろうとするが、た
めらってその場を去っていく。

男子トイレから雅也が出てくると、雪
奈の後ろ姿に気が付き、浩平の様子を
伺う。

と、階段から瑞枝が降りてくる。

瑞枝「うっちー」

雅也「しーッ。(とベンチに案内すると)ね
え、眞榮田とゆきちゃん、あれからどうな
った？」

瑞枝「さあね。私も、もう何も言わないこと
にした」

雅也「そっか。まあ、今のところ二人からは
特に相談は来てないけど」

瑞枝「今の冷戦状態が、いつまで続くかだね」
雅也「そうなんだよ。アメリカで、みずちや

んが言ったみたいに、結論はちゃんと出さなきゃいけないとは思うけど、でもだからって、変にこっちから催促するのもおかし話だしね」

瑞枝「何もうちーが変に気にすることないでしょ」

雅也「それはまあ、そうなんだけどさ」

瑞枝「うちーは、人が良すぎるの。そりゃ、それがうちーの良いところではあるけどね」

雅也「みずちゃんは、彼氏さんとかいないの？」

瑞枝「急にどうしたの？」

雅也「眞榮田のこと、いろいろアドバイスしたりするってことは、実際にそういう経験があるんじゃないかなと思って」

瑞枝「前はいたよ。でも、とっくの昔に別れた」

雅也「そっか」

瑞枝「うちーは、いないの？」

雅也「え……？」

瑞枝「いるの？」

雅也「いや……いない」

瑞枝「うっちーも、忙しいもんね」

雅也「……」

N「何故か僕は、周囲にナミと付き合っていると
いうことを話すことができませんで
した」

11 木内家・居間（夜）

雅也が夕飯を食べている——風呂上がりの真保が入ってくる。

真保「今日、洗濯しといてね」

雅也「分かった」

真保「じゃあ、おやすみ」

雅也「おやすみ」

出ていく真保。

N「当然、ナミとの話は、家族にも伝えることが
できませんでした」

12 名古屋芸術専門学校・全景

大雪が降っている。

N 「クリスマスを一週間前に控えたこの日は、珍しく大雪が降り、電車のダイヤも大きく乱れ、朝七時過ぎに家を出た僕が、学校に到着したのは四時間後のことでした」

13 同・屋上

雪が積もっている——海外研修の写真
をまとめたアルバムファイルを持った
雅也が待っている。

と、ドアが開き、浩平、瑞枝、夏美、
篤志、裕司、拓海が入ってくる。

浩平 「どうしたの、うちー。みんな集合な
んて」

雅也 「ちよつと早いクリスマスプレゼントを
渡そうと思ってね。（とアルバムを見せて）
じゃじゃーん。海外研修の写真をまとめて、
アルバムにしてみました」

裕司 「マジかッ。すげえ、うちー」

雅也、それぞれアルバムを配布して
いく。

篤志「ありがとうッ（とハグをする）」

雅也「いえいえ」

拓海「いつの間に、こんなものを」

夏美「全然気づかなかった」

瑞枝「これは嬉しいわ」

浩平「さすがだわ、うちー」

雅也「サプライズ、大成功！」

浩平「よし、こうしてみんなが顔を揃えたん

だから、やることは決まってるよな」

瑞枝「もちろん」

夏美「こういう時は、大体決まってるもんね」

篤志「よし、やるか」

裕司「よっしゃー」

一同、雪を掴むと、雪合戦を始める――
―容赦なく雪玉を投げ合う。

雅也「アルバム濡らさないでよ」

浩平「分かってる」

いつまでも雪玉を投げ合う一同。

N 「海外研修の写真をまとめたアルバムを作
って手渡しするというサプライズは大成功
を収めました。みんなに気づかれないよう
に、こっそりと編集作業をしていましたが、
その時僕は気づいてしまったのです。ナミ
との写真を撮っていなかったことに」

14 木内家・雅也の部屋（十日後）

雅也が掃除をしている。

N 「冬休みに入り、学校も閉まっているため、
僕はしばらくできていなかった部屋の大掃
除を始めました。アルバムを渡した日から
十日が経った、十二月二十七日のことです」

雅也のスマホの通知音が鳴る——雅也、
気が付くと、スマホを開き、雪奈から
のLINEを確認する。

雪奈の声「昨日、浩平と別れた」

返信する雅也。

雅也の声「そっか。もう未練はない？」
と、雪奈から返信が来る。

雪奈の声「うん、もう大丈夫。うちーには、
たくさん心配かけました。ごめんね」

と、浩平からのLINEの通知が来る
——浩平のトークを開く雅也。

浩平の声「昨日、雪奈と別れた。うちーに
は、いろいろ迷惑かけて、ごめんなさい」
と、返信する雅也。

雅也の声「全然大丈夫！」

N「実は、数日前に二人からそれぞれLINE
Eが来た時、偶然にも二人ともが十二月二
十六日に別れ話をするという連絡を受けて
いました。僕は唯一、この二人が別れる日
を知っていたのです。眞榮田と雪奈ちゃん
の件は、これで終わりを告げました。そし
てそれは、僕自身も……」

雅也、美南にLINEを送る。

雅也の声「年末年始、どこか出かけない？」
しばらく待っている雅也——通知が来
て、トークを開き、美南からの返信を
見る。

美南の声「バイト」

スタンプで『OK』の返信をする雅也。

15 名古屋芸術専門学校・表

門松が飾られている。

N 「そして、年が明けてすぐ、僕らは卒業進級制作展の準備に向けて、最後の編集作業に追われていました」

16 同・5階・502教室

雅也、美南、他の生徒たちが紙データを
を見ながら、赤ペン片手に校正作業を
している。

雅也「ねえ、ナミ」

美南「どうした？」

雅也「目次とタイトルのページって、ノンブルつけるんだっけ？」

美南「つけないよ」

雅也「じゃあ、このデータ間違ってるね。後で直しとくわ」

美南「（プリントを見て）本当だ。中身も大事だけど、そういう全体のところもちゃんとチェックしないとね」

雅也「そうだね」

美南「ねえ、堀内先生のほうでやってた、雑誌企画のほうはどうなの？」

雅也「今、取材先のチェック待ち。先方のOKが出ないと、作業進まなくて」

と、パソコンにメールの通知音が来て、メールを開く。

雅也「え……」

美南「どうしたの？」

雅也「修正依頼が来たんだけど、また面倒な修正だな……グラフィック専攻の先輩に相談してくるわ」

美南「あ、今グラフィック専攻の先輩、プレゼンの練習中だよ」

雅也「マジか……じゃあ、それ終わらないと、作業進められないじゃん。ちよつと、四階行ってくるわ」

と、大きな溜息をついて出ていく。

17 同・4階・廊下

雅也が階段を降りてくる――ベンチでパンを食べている浩平と直也。

浩平「おつかれ、うちー」

直也「おつかれ」

雅也「おつかれ」

浩平「どうした？」

雅也「デザイン専攻の先輩に用事があったんだけどね」

直也「先輩たち、今一番忙しいタイミングだから、うちーの用事に時間作る暇なんてないかもしれないぞ」

雅也「こっちも急ぎなんだよね。取材先に、また修正原稿確認してもらわなきゃいけない」

直也「例の雑誌企画だっけ？ 確か、そっちの先輩と、グラフィックの先輩で上手いかなかったって聞いたけど」

雅也「まあね」

直也「そっちの専攻の先輩たち、あまり良い話聞かないからな。あと、先輩たちとよく一緒にいる、同期の野添さんだっけ？ あの人もあんまりな」

雅也「……」

浩平「うちーにそんなこと言ってもしょうがないだろ」

直也「良いものを作るには、作業環境と人間関係が大事だって言いたいんだよ」

と、401教室に戻っていく。

浩平「あいつの言うことなんて、気にすんな」

困った顔の雅也。

N「卒業進級制作展に向けての準備の中で、学生たちの疲労は溜まっていく一方でした。こんな精神状態の中で、無事に作品が完成できるのかと、不安な日々が続いていました」

つづく